青函みらい会議　発言要旨

第１部　基調講演

北海道教育大学函館校　奥平理准教授による講演

演題「マイクロツーリズムと青函圏」

マイクロツーリズムの定義

マイクロツーリズムは、自宅から1時間程度で行くことができる範囲で、公共交通機関を避け、自家用車による移動を中心とした旅のこと。地域の魅力の再発見を念頭に置いた旅で、新型コロナウイルスの影響が不安視される中で、コロナ禍における旅のあり方として注目された。以下の4つの特徴が挙げられる。1つ目、ウィズコロナ期の旅行ニーズである小さな旅行であること。2つ目、感染拡大防止と地域経済を両立する観光であること。3つ目、地域から学び、地域の再発見を提供すること。4つ目として、地域文化の作り手と旅行者とのネットワークを強め、地域の運営力を高めることができるということが挙げられる。

青函圏は高速道路、フェリー、新幹線などの交通網が発達しており、さらに世界遺産もあることから、マイクロツーリズムの推進には有利な条件が揃っている。その中で、さらに観光を活性化するためには「地域人財の育成」が非常に重要である。

青函圏における人財育成の変遷

近代以前の青函圏は青函連絡船を通して交流していた。連絡船に乗った担ぎ屋の女性たちにより、青函の間でヒト・モノ・カネがやり取りされていた。青森からは、特産品である津軽米、お酒、りんごなどが入ってきて、その特産品を売ったお金で、函館からするめいか、塩鮭、みがき鰊などの海産物などを購入し、青森に持ち帰っていた。青函連絡船を介して人財と商材、つまりヒトとモノとカネが同時に動いていた。

平成以降は、上記と異なる既存の枠組みを超えた人財の動きが見られた。例えば、津軽海峡マグロ女子会は 2014 年 3 月 4 日に発足した、パネリストの工藤夏子様が北海道側代表を務める組織。老若男女問わず参画しており、「連携」「発信」「創造」をミッションに掲げ、青函圏を盛り上げる活動している。

また、バル街、つまりチケット制の飲み歩きイベントは函館が発祥で、その後青森バル街と弘前バル街として広がり、今や全国で行われている。反対に、街歩きは、青森から函館にやってきたイベント。「あおもり街てく」という名前で、青森の商店街をガイドと一緒に回るイベントがあり、現在では函館でも行われている。このように、平成以降人財が多様化し、青函圏では海を越えて様々なことが広まり、実施されている。

青函圏における今後の人財育成について

コロナ禍前の 2016 年、青函圏の 4 都市（函館市、青森市、弘前市、八戸市）は、合計（延べ数）で 2300 万人の観光客が訪れている。この数字を見ると、青函圏はすでにわが国屈指の観光地と言えるが、各地域で連携することで大きな効果を生む可能性がある。その一つの方策として、観光客を周遊させることが挙げられる。青函圏は、縄文遺跡と未成線（軍事関係で建設したが、最終的には完成しなかった鉄道）を用いた周遊の旅が可能。今後は、周遊の旅が 1 つ大きな軸となる。

さらに、先ほど取り上げた津軽海峡マグロ女子会のように、それに続く人財をどう育てていくかが重要。青函連絡船が廃止され、貨物列車を使うことで、直接の商取引は減り、ヒトとカネはもはや一緒に動いていない。しかし、移動手段が特急から新幹線に変わり、時間短縮になったことで、結果として地域交流の活発化に繋がった。バル街、街歩きの拡大、そして新たな人財の登場に見られるように、人財が細分化し、ボランティア化が進んでいる。ボランティア化することで、希望する老若男女全てが人財になり得る時代になった。

令和以降、コロナとの闘いが始まった。コロナウイルスの感染拡大と外出制限、入国制限、都道府県間の移動制限など、いわば人間活動が停止状態だった。結果として、今はコロナ禍で活躍の場を失った大学生や高校生へ積極的に働きかけ、新たな人財、多様な人財を蓄える時期に入っている。人口減少と高齢化により進んでいる人財難が解消でき、また若い人が入ることによって人財不足で活動が停滞している様々な団体等が活性化していくのではないか。その例として、北海道教育大学函館校の学生たちが、古民家を借りて共同生活をしている。さらに、町内会の役員になり、街の活性化を目指してる。

マイクロツーリズム推進の事例

ゼミ生と縄文遺跡関連書籍を執筆

昭文社から昨年 8 月に発刊された『北海道・北東北の縄文遺跡群を旅するガイド』は、2 年生のゼミ生と一緒に執筆したもの。学生は、どこで、何をするのか自ら計画し、調査を行った。

「観光コンシェルジュ実習」で学生ガイド育成

北海道教育大学函館校でも、昨年度から観光コンシェルジュ実習として学生ガイドの育成を本格的に始めた。活動を行う中で、ガイドになりたい、観光業に就きたいと言う学生が増えたという印象がある。函館市内のボランティアガイドの高齢化が進んでおり、ガイドの人数も減ってきているため、学生が参加することで、ガイド団体の活性化に繋がると期待している。

函館 YWCA と協働し「はこだてピースマップデジタル」作成

授業の中で、YWCA が作成したピースマップ（函館の戦争関連の出来事を示した地図）の電子化作業を学生が行い、今年 2 月に公開した。このような活動を通して、学生でも様々なことができるという気づきを得て、いろいろな活動に積極的に関わるようになるなどの成長が見られた。

青森公立大学での「大学生」への働きかけ

青森の学生に 2019 年のクリスマスファンタジーを見に来てもらい、街歩きをした。学生たちは「函館にはこんなにたくさんの観光資源があるのか」と気づいたようだった。街の写真を撮って、それを SNS に投稿していたが、それも観光の PR に繋がる。若い人たちが函館に来るきっかけとなればと期待している。

まとめ

近代以前の青函圏は、文化や言語を中心に人間の内面で繋がる部分が多かった。近代以降になると、より世俗的に繋がるようになる。連絡船がヒト・モノ・カネを移動させることが青函の繁栄に繋がった。商業的な繋がりは、交流をもたらしたが、連絡船廃止後、その繋がりは衰えていった。しかし、その後、既存の枠組みを超えた多様な人財が今度は繋がり始めた。例えば、津軽海峡マグロ女子会であったり、大学生の活動が挙げられる。そして、人財の多様化と細分化、ボランティア化が進むことによって、誰もが人財になり得る時代が到来した。この新しい人財がマイクロツーリズムで、この地域を支えてくれるのではないか。

少子高齢化が進む中で、若い力が必要。そして、大学生や高校生などの若者が、青函圏を担う人財として域内で調達可能であることから、人財をきちんと育成していくことで、青函圏で継続的にマイクロツーリズムを進めていくことができるであろうと考えている。

第２部　パネルディスカッション

青函圏を中心に各分野でご活躍されている方々をお呼びし、パネルディスカッションを行った。

パネリストの紹介

清川繁人

青森大学で縄文研究をはじめ、現在ではイルカ・忍者の研究も行っている。日本初の忍者部を設立し、忍者ショーを各地で行っているほか、弘前市内の忍者関係施設を案内するボランティアガイドも行っている。また、陸奥湾沿岸の地域活性化のため、イルカウォッチングツアーガイドも行っている。

工藤夏子

松前町矢野旅館の若女将であり、津軽海峡マグロ女子会の北海道側の代表。津軽海峡マグロ女子会は津軽海峡圏 18 市町村の約 70 名で活動している。メンバーのアイデアから青森（肉）と北海道（にしん）の食材を使った新幹線の駅弁をつくるなど、地域を必死に守りたいという思いを行動に表すことで、新しく豊かな地域を目指し活動している。

山田かおり

縄文 DOHNAN プロジェクトの代表。「産学官民協力によって、縄文の心で人とまちをつなぐ」をテーマに 2019 年から活動を始めた。縄文にまつわるイベントを開催し、世界遺産登録と道南エリアの PR 活動などを通して地域活性化に取組んでいる。

高坂幹　（オンライン参加）

青森県観光企画課、青森県観光連盟で観光関連業務に携わり、2021 年 4 月からあおもり創生パートナーズ株式会社に在籍。人口減少の時代であることから、食・観光・ものづくりを中心として地域の活性化や産業振興に取組んでおり、昨年度は、弘前における「歴史的建造物利活用（文化観光まちづくり）プロジェクト」に取組んだ。

テーマ1「再発見したい地域の魅力」

パネリストが地域の人々に再発見してほしい青函地域の魅力について、議論を行った。

清川繁人

自己紹介の中でも話した忍者とイルカは、以前は知られていない観光資源であったが、徐々に地元を中心に知られてきた。函館の文化資源には幕末から明治のストーリー性が見られる。一方、弘前にもたくさんの魅力的な資源があるが、江戸・明治・大正時代と散漫であるので、もう少し整理をして、体系的に魅力をアピールしてはどうか。

工藤夏子

道南には、津軽海峡を行き来する北前船を通じて、青森から文化や料理が伝わってきた。文化の伝播に着目することで、新しい素材やストーリーが生まれてくるのではないか。

清川繁人

縄文時代から道南と青森は繋がりがあるため、何に着目し、どのようなストーリーを構築するのか、両地域で議論して、魅力を高めていけたらいいと思う。

山田かおり

以前から青函の交流はあったが、北海道・北東北の縄文遺跡群が世界遺産になり、より双方の関心が高まっているのではないかと感じる。函館では、幕末に土方歳三や榎本武明が降り立った場所にも縄文遺跡があった。幕末の人もこの縄文土器を見たのか、そしてそれをどう思ったのかと想像するだけでも楽しむことができる。文化と歴史を掛け合わせると新たな発見がある。

清川繁人

縄文遺跡は全国各地にあるにも関わらず、北海道・北東北エリアが世界遺産に選ばれた。選考の理由として、共通の文化圏にあることが挙げられると聞いているので、これからも「文化圏」ということに着目し、魅力を見つけていきたい。

高坂幹

コロナ前に、中国の観光客誘致の仕事をしていたことがある。「東北」という言葉は中国人にとって印象が悪いそうだ。一方で、北海道は中国人にとって人気の地で、雄大な自然・食べ物もおいしく、函館には幕末明治の景観など非常に良い印象を持っているので、青森に集客したければ、地図に北海道の一部として記載した方が良いと、中国の旅行会社の人に言われたほどである。その時に、北海道に

ない青森の魅力を考えたところ、青森には江戸時代の日本の原風景、ねぶた祭、酒蔵、伝統工芸、忍者などがある。青函のコンテンツをかけ合わせることでシナジー効果が生まれる。中国人向けに、両方楽しめる観光コースを作った結果、アンケートでは非常に好評であった。

テーマ2「青函地域の連携強化」

基調講演の中でも紹介があった「津軽海峡マグロ女子会」など、青函の津軽海峡を越えた連携が行われている。青函で連携を強化し、津軽海峡をまたいだ地域活性化やマイクロツーリズムを一層推進するためには、何が必要になるか議論を行った。

工藤夏子

まずは「知る」ということが大切。旅館をやっていると、お客様から江差や木古内など翌日どこに行ったらいいのか、何をしたらいいのか聞かれることが多い。連携を深めるためには、連携先の地域を理解することが重要。１つの地域だけでは観光客を満足させることは難しいので、周辺地域と相互理解を深め、共存・共栄していかなくてはいけない。

山田かおり

新幹線が札幌まで延伸になると、函館の夜景を見るために宿泊していた人たちにとっても、青函地域が通過点になってしまう可能性があるので、周辺の魅力をあわせて、泊数を増やす必要がある。先日、青森で「オンライン冬景色」というイベントの中で道南の魅力も発信する機会があった。プロモーションについてもこれからは1つの地域ではなく、周りの地域も巻き込み全体で盛り上げることも必要。

清川繁人

イルカと忍者のツアーは、津軽海峡マグロ女子会のメンバーの旅行会社にアイデアを提供して、行っている。ネットワークを活用すると、できることが大きく広がることを身をもって体験した。また、青森の人には、函館はなじみある場所だが、松前や江差など他の道南地域に行ったことがない人も多い。函館以外の魅力ももっと発信し、お互いの地域を知ることで連携強化に繋がると思う。

高坂幹

函館のクリスマスファンタジーに倣って、青森でもクリスマスマーケットを始めたが、これは同じクリスマスイベントでありながらも青函で少しコンセプトを変えて実施することで相乗効果を期待したもの。観光の消費の4大要素は、宿泊・交通・飲食・お土産。青函両地域でゆっくり周遊してもらう仕掛けを戦略的につくって、2、3泊してもらえればお土産代や飲食も増えて相乗効果が期待できる。

テーマ3「地域人財の育成促進」

多様な地域人財を育成し、地域を活性化させるためには今後どのような取り組みが必要になるか議論を行った。

高坂幹

弘前大学には、県外出身の学生が多いため、学生に地域の魅力を知ってもらったり、参画してもらうことで、青森県での就職に繋がることもある。地元の人には当たり前なことでも県外の人にとっては魅力的なこともあり、新しい発見がある。学生にちょっとだけ参加してもらうというよりは、大学と協働し、カリキュラムの中に位置づけて、地域づくりに参画し、事務や企画も含めて学生が主体的にやったという手応え感を持ってもらうことが必要なのではないか。自分たちの意見が形になって、たくさんの人が喜んでくれたら、その積み重ねがシビックプライドの醸成に繋がっていく。またコロナ禍で、テレワークが普及し、居住拠点を東京などから青函地域に移している人もいるので、そうした新しい住民も地域づくりに巻き込んで、人財力を戦略的に高めていくことに取り組めば、青函圏の将来は明るい。

工藤夏子

過疎地域に住んでいる人は、人財育成されているという感覚はなく、生きていくための方策をみんなで考えているだけである。このままじゃ生きていけないという危機感から、策を練ろうという人が少なくない。地域で喜ばれることを発言・考える場所がないので、そのための土俵を作ることが大切。津軽海峡マグロ女子会は、お茶を飲みながら地域自慢をしてみたいというのがきっかけで始まった。また、地元の高齢者が色々な取組みを行うよう勧めてくるが、実行する人がいないのが現状。やってみたいことを実現できるような場所を作ることも大切。

山田かおり

学生たちの中には、コロナ禍でも地域に係わって何かやりたいという人が多い。縄文の多言語紙芝居を6言語で作成した時も、学生が協力してくれた。苦労した分だけ縄文に関心を持っていただけたので、その後の活動にも関わってくれている。特定の人の活動だけが地域活性化に繋がるわけではない。地域のたくさんの方に地域づくりに参加してほしい。そして、多くの人が集まった時にその人々をどう生かしていくか、参加した人の長所を見つけて、サポートして動かすことができる人財の育成も重要。

清川繁人

イルカツアーの出航の判断といった安全性に係わることは学生に任せることはできないし、忍者についてもガイドブックに書いていないことが多く一人前のガイドになるには時間がかかる。このツアーに高校生を招待するなど若いうちからイルカに触れてもらい、将来、ガイドを継承してくれる人が増えてほし

いと思っているが、ガイドを仕事とできるのか、もしくはボランティアなのか、ガイドとしての立場をどのように構築していくか悩ましい。受け皿を広げていかなければいけない。

北海道教育大学函館校　奥平理氏による総括

テーマ1は、歴史と文化の融合、相互作用で違うものが生まれてくる、それをどうやって情報発信していくか、という話だった。テーマ2は、キーワードは共存共栄だった。そのために、関係人口・交流人口をいかにして増やすのか。函館の平均泊数を 2 泊以上にしたいが、1.8 泊程度にとどまっている。連携し、関係人口を増やせれば光が見えるかもしれない。クリスマスマーケットとクリスマスファンタジーのシナジー効果、相互に同じようなことをやることも大事。ねぶた祭と函館港まつり、五所川原の立佞武多、弘前のねぷたの日程も長期滞在には向かないので、日程調整してはどうか。テーマ3は、住民の話す場、参加する場が受け皿として必要ということ。これができれば、シビックプライド・住民意識も高まっていくと考えられる。

（以上）